2018 FORMULA 4 CHAMPIONSHIP

JAF F4

PADDOCK NEWS Vol.2

国内唯一開発競争のある ミドルフォーミュラF4の魅力を探る

新たな規則に適応した 「モノづくりの原点」

夫婦で挑む 夢への一歩

フォーミュラ・ルノーのマシンをベースにオリジナルF4を誕生させたチームの苦労と成果

「モノづくり」を推進するため行なわれた車両規則改定のなかでひとつのポイントが、フォーミュラルノー向けに開発されたタトゥース製モノコックをJAF認証サバイバルセルとしたことだ。これにより、世界に多数存在するフォーミュラルノーの中古車をベースにJAF F4車両を開発することが可能になった。これを受けて早速、タトゥース・モノコックを使った新顔がサーキットに現れた。ハンマー伊澤選手が開発した〝疾風(はやて)〟である。開発のきっかけについて伊澤選手に聞いた。

「本業は建築業・大工です。もともとモータースポーツが好きでハコ車を走らせたりしていたんですが、5、6年前からフォーミュラカーに乗ってみようという気持ちになり、FJ1600で草レースに出たら、フォーミュラカーのダイレクト感、4輪車でありながら風を受ける感じにのめりこんでしまいました。スーパーFJを経てアルミシャシーのJAF F4を自分で買って3年くらい走ったのですが、カーボンシャシーのマシンに乗り換えようかと思っていたら、今年から規則が変わってFルノーをベースにモディファイしてJAF仕様にすれば参加できるようになったんです。それでやってみようと思い、自分で中古のFルノーを探してクルマを作りました」

本業を生かしたオリジナル

これまでコンストラクターでもなかった伊澤選手はなぜ自分でマシンを作ろうと思い立ったのだろうか。

「もともとモノを作るのが好きですし、ちょっと人と違うことをしてみたいという性格なので、自分の実力を見るにもそうした方がいいかなと考えたんです。レギュレーションが変わらなかったら既存のクルマを手に入れていたと思います。でもFルノーをベースにできるなら自分でも作れそうだなと。Fルノーの性能は大体見えていたのでそれほど冒険ではありませんでした。自分でJAF F4仕様にモディファイすることについては、メカ的な部分にはあまり手を入れる必要がなくて主に外装をいじればいいだけなので、それなら自分で出来ると思いました」

こうして伊澤選手は、人づてにFルノーの中古車を探し、なんとマレーシアで眠っていた車体にたどりついてそれを入手した。車両自体は安価だったが、状態があまり良くなく、思いがけない出費も強いられたという。

「安いには安かったんですが、程度があまりよくなくて、まともに走ることすら難しい状態だったんです。1回全部完全にバラバラにしてもう一度組み立てたんですけど、その過程で、おかしなパーツが結構入っていたり悪いところがあったりして、それをどんどん交換していくと最終的にすごく時間がかかり、出費も多少かさみました。でもクルマの勉強にはなりましたね」

自力でのモディファイに苦労はなかったのだろうか。

マレーシアで眠っていたというフォーミュラ・ルノーのマシン。ベースはルノーのマシンのため、その影が残っているのが分かる。だが、実際にはあらゆるところに手が加えられ、“オリジナルF4”の車両が出来上がった。まさにモノづくりの醍醐味といったところだろう。

JAF F4の車両規格上、フォーミュラ・ルノーのマシンそのものではレースに参戦することはできない。そのため伊澤氏はもともとのステップドボトムの下に、さらにベニア板でフラットボトムを製作し、取り付けた。それによってフラットボトム化を実現したのだ。

「どういう寸法、どういう強度にしなければならないのかということについて、協会の方から指導を受けたので、それほど苦労しませんでした。ふだん建築業で大工をやっていて、木を使った工作にも慣れてたからでしょう」

JAF F4とFルノーを比較したとき車両規格上、もっとも大きな違いはJAF F4はフラットボトム、Fルノーはステップドボトムである点だ。JAF F4を作る際には、当然ながらフラットボトム化が必要だが、伊澤選手は本業でもなじみの深い〝ベニヤ板〟でフロアを自製した。

「ベニヤ板は強度的にはそれほど強いものではないので、いろいろ補強を加えないとダメでした。実際ベニヤでフロアを作って走ってみると、ちょっと縁石で擦っただけで1㎜、2㎜簡単に削れてしまうので、ベニヤではちょっと厳しいかなと。いまはアルミ板で作り直そうかなと思っているところです。金属加工が必要ですけど、出来合いのアルミ板を買ってきてそれを切る分には問題なく自分でできるかなと思っています」

夫婦二人三脚で目指すもの

驚くべきことに伊澤選手は、クルマづくりを夫人と二人三脚で進めた。エントラント名を「ハンマーレーシング疾風(はやて)☆夫婦坂」と名乗っている所以である。サーキットの現場でも、つなぎ姿の夫人が常に寄り添い、疾風のメンテナンスからサインボード掲示までをこなしている。

「うちの妻も（モータースポーツが）好きなので、今までレース活動はずっと一緒にやってきました。本業も一緒にやっています。今回のクルマ作りもふたりでやりました。一緒にやってくれるのでぼくもレースをやれているという面もあります。筑波にガレージがあって、住んでいるのは千葉なので、本業をなるべく早く終わらせて毎日夕方から夜、ガレージに通って作業をしました。3か月くらいかかりましたね」

「わたしは言われたことをやっているだけ」と里美夫人は笑う。傍目からはうらやましい関係だが、予想外の作業が割り込み、デビュー戦に向けた夫婦の作業は壮絶な状況に陥ったという。

「前日の深夜3時くらいまで作業をしてなんとかSUGOに運び込んだですが、どうしても不十分なところがあって、SUGOに入ってからもほぼ毎日徹夜しました。アンダーパネルを外さないといけない作業がいっぱいあって、SUGOのピットで、夫婦で右と左を分担して寝そべって作業をしていたら、ついついそのままふたりで眠っちゃっていたことがありました。ちょっとおかしいですよね」と伊澤選手。

「SUGOは、うっかりアンダーパネルの上に工具を置き忘れたまま走ってコースに落としてしまい厳重注意を受けました。みんなにも迷惑をかけたので、もう少し考えないとだめだなと反省しています」

夫婦で産みの苦しみを乗り越え、ツインリンクもてぎで開催された参戦2大会目、東日本シリーズ第3戦に臨んだハンマー伊澤駆る疾風は5位入賞を果たした。ようやく本来目指したパフォーマンスが発揮され始めたようだ。

「ベースのクルマの状態がきちんとしていれば、JAF仕様へのモディファイはそんなに大変な作業ではないと思います。もちろん、Fルノーを買ってJAF F4に出たいという人が他にも出てくれば相談に乗ったりも出来ると思います。ただ、モノを作ることは好きでも、楽しむレベルを超えると苦しみに変わっちゃうこともありますけどね（笑）」

ハンマーレーシングは、新たなF4コンストラクターとして歩み出したのである。

●ハンマー伊澤氏
昨年まではアルミシャシーのマシンにて、F4東日本シリーズに参戦。今季は新たな規則に適応した1台目を全チームのなかで初めて導入し、開幕戦から出場を続けている。ツインリンクもてぎで行なわれた第3戦で今季初入賞。

S.Sakai

モノを作るのが好き。人と違うことをしてみたかった

DUNLOP

F4東西シリーズは
ダンロップタイヤの
ワンメイクレースです

FORMULA FOUR 4
F4協会HP
www.f4k.co.jp

RACE RESULT
EAST SERIES
Round 3
6月10日
▸ツインリンクもてぎ